

教育実践研究

附属教育実践総合センター・平松 義樹

1 授業の目的と概要

本講座の目的は、最近の学校教育をめぐる諸問題、特に学力論や授業論について実践的に研究していくことにある。そして、教師としての使命感や実践的指導力を培うとともに、人間としての生き方について自ら考える力を育てることをねらいとしている。

2 学生による授業評価

本講座では、テスト時に、学生がどのような態度で受講したか自己評価させている。また、大学における授業改善のため指導教員である教員評価と15回の講座総合満足度評価を実施している。今年度の結果は、下記のとおりである。

[学生の受講態度自己評価]

優(30%)、良(55%)、可(13%)、不可(2%)

[学生による教師評価]

優(98%)、良(2%)、可(0%)、不可(0%)

[学生の講座満足度評価]

優(85%)、良(15%)、可(0%)、不可(0%)

今年度の傾向として、教師や講座への満足度は高かったものの、学生自身の自己評価はやや低かった。私語もなく居眠りもなく教員からみると受講態度はよかったのであるが、学生はやや控えめに自己評価したようである。

3 学生の自由記述による授業評価

『教育実践研究Ⅱ』という講座は、私にとって・・・という文章に続けて、自由記述によって15回の講座を振り返らせた。授業目的との関係で、どの程度、達成されたかを知るためである。以下は、学生の文章のいくつかをリストアップしたものである。

(S) 目標であり、夢であった。平松先生の数々の実践は、私にとって言葉では言い表すことができないほど、刺激を受けるものばかりである。こんなこと私にできるのか、先生みたいな力は持っていないなど、不安を感じることも多々あったことは事実である。しかし、「やっぱり先生はいいな」と、再度、教師という職の魅力を感じるこ

とができた。たくさんの著書を残している教育者の考え方を教授していただいたが、平松先生はそれらを「自分ならこう考える」と自分の知識・経験からその考え方を練り直して、実践に生かされている。だからこそ、先生の言葉一つ一つには深い意味が込められているように思う。平松先生の物語に登場する子どもたちは、みんな輝いている。「先生についていけば大丈夫」と子どもたちが安心して学べる環境があったからだろう。よい授業は、よい学級経営、よい人間関係・・・その前に、子どもたち一人ひとりのよさも悪い点も認め、受容すること。原点に返ることができた。

(K) 一つの物語の中を駆け巡ってきたような時間でした。それは、私が平松マジックにあたかも簡単にだまされてしまっていたのではないのでしょうか。「坊っちゃん」という主人公をかかわりに、様々な登場人物が出てきました。どの人物も大変素晴らしい方たちばかりでした。実際にこの目で、この耳で聞いたお話は、私自身の人生に強く影響を与えるものでした。「教師になるから大切なこと」だけでなく、一人の人間として生きていく上で大切なことを教えられた気がします。物語を読んだことで、頭の中により明確なドラマが作り上げられていきました。まるで『二十四の瞳』のように。しかし、こんなに素晴らしい光の部分歩まれてきた平松先生も、私たちの想像しえない影の部分も乗り越えてこられたのでしょう。影があるからこそ光が引き立つように、これから生きていく中で影に包まれてしまったとしても、常に光を求めて歩き続けたい、そう強く思います。そして、今でも、光を凝縮して、私の生きた証とすることはできます。日々を大切に、小さな光から大きな光へと成長させられる人間になりたいです。

(Y) 一番勉強できたと思えるさまざまな時間でした。教師として学べたこともたくさんあったけれど、一番「人」としての勉強ができたと思います。それは、教師が人を育てる職業である、ということで、人の師となる者は誰よりも「人」でなければならぬ、と考えさせられました。汚い部分もあれば弱い部分もあって、だから、一緒に学ぶという謙虚な心が必要だということや今、現

在、日本の人の問題となっている側面を解決できるのは教師であるのではないかと考えることもできました。「愛する気持ち」「情熱を持って取り組む気持ち」。これは現代人が一番勉強しなければならないものだと思います。そこまで考えさせてくれた。



＜「情熱」について熱く語りかける金本房夫先生＞

この教育実践研究Ⅱは、人生について勉強できる時間でした。本当にありがとうございました。4回生になって取れる授業があったら、坊っちゃん先生の授業、絶対、受講します。

(S) 教師という職業に本当に就くのかを考える意味、機会となっていた。本当にこの講義中、ずっと教師という仕事のやりがいや難しさ、私が教師になれるのか、なったとしたらどんな教師を目指すのか、深く考え悩んだ日々が続いたような気がする。ちょうど教育実習を終え、週2回、小学校に実習に行っていたこともあって、自分の経験を思い起こしながら考えることができた。教育実習や日々の実習で失敗したことや、うまくいかないことを思い出して、私には教師なんてすごい仕事できないし、やってはいけない、どうしたらいいんだろう・・・とネガティブになってしまったときに、『平成坊っちゃん物語』や平松先生のお話を聞いて、教師はすごく楽しくてやりがいのある仕事だということに気づかされ、ポジティブになって帰ることができたと思う。だが、逆に、こんな現状があるのか、平松先生見たいにはなれない・・・と自信をなくして帰ることも正直あった。15回の講義を終えて、今は「やっぱり子どもが大好きだし、子どもと一緒に成長しながら一生懸命努力し続ける教師になろう！」と決意している。早く自分が担任するクラスを持ちたいと思うし、子どもと教師が本気で語り、思い出に残るクラスづくりをしていけたらと考えている。素敵な講義をありがとうございました。

(H) 「何のために教師になるのか」また「どのような教師になりたいか」を改めて考えさせて

くれた授業となりました。多くの理論もしっかり学ばせていただき、そして、平松先生をはじめ外部先生など、あこがれる、目標とすべき先生と会うことができました。講座を受けて、一番良かったと思うところは、平松先生とつながりができたことだと思っています。「こんな先生になりたい」と思える「師」に会えてとても嬉しく思っています。授業とは「教える－教わる」という教科書の内容にとどまったことではなく、教師の人生が語られ、子どもの人生の中で生きていくことだと思っています。小手先の技術だけではなく、子ども



＜チョークの使い方を具体的に説明された豊田克文先生＞

の背景まで考えられるような教師になりたいと思いました。この授業を通して、人との出会いや学んでいく姿勢など心の面での学びがとても多かったように思います。とてもワクワクして、すごく楽しい授業でした。『平松少年物語』のように、自分自身の物語を、これから出会う子どもたちとつづけていきたいです。ありがとうございました。

(M) 「教師」を具体的に考えるきっかけになったと感じます。今まで「夢」としての「教師」であったものが、教育実習を経て、その経験を平松先生の経験とも照らし合わせながら、より具体的なイメージをふくらませることで、実際に「教師」として、どのように子どもたちと向き合っていくかと自分が考えるのかを、再度、考え直すようになりました。また、『平成坊っちゃん物語』の終わりにもあったように、教師は「良い」とい面だけではないと思いますが、あえて「良い」面を、本当に生き活きと、そして、笑顔でお話くださる平松先生から「教師って素敵な職業なんだよ。頑張ってやってご覧」というエールをいただくことができたように感じる講義でもあります。教育実習が終わり、就職活動や教採かという、少し平松先生と似た状況の中での受講でしたが、平松先生が「教師」となったきっかけや「教師」としてまた「人」としての先輩の言葉を話していただい

たことで、私自身、「教師」はもちろん、その前に「人」としてこれからの人生をどう歩んでいくのかということについて、考えることもでき、改めて「教師を目指すのも悪くない」と感じるようになりました。教採も半年後に控えています。この講義で得たものを大切にしながら、より具体的な教師像、教育観を持って、そして、何より教育に対する熱い思いをもって努力していきたいと思えます。

(Y) 教師として、そして人間として成長できた授業でした。『平成坊っちゃん物語』をはじめ、先生の授業では、教師という枠組みを超え、一人の人間として大切なことを多く教わりました。苦手の部活、気が重い仕事、研究授業などに積極的に取り組んだ、ということが記事に書かれています。自分の専門以外に挑戦することは、多くの可能性や学びを秘めていると思えます。このチャレンジ精神は、教師に限らず、生きていく上でとても大切なことだと感じました。そして、その上に教師は「生徒のために」という、生徒の存在がプラスされるのだと思えます。教師にとって、一番の原動力は、生徒の存在です。何事にも貪欲に挑戦する。これはもちろん自分自身のためになりますが、その先には「生徒のため」になります。これから多くの仕事や難問が待っていると思えます。しかし、そんな時こそ、心にゆとりを持ち、学校全体で生徒のことを考えることができる、そんな学校をつくっていききたいです。先生のお話の中には、いつも子どもを思う愛がありました。私もこれから教師として、自分の教師力に磨きをか



<ワークショップ型の授業で学生を熱中させる山内孔先生>

け、生徒のために日々勉強してゆきます。本当にありがとうございました。

(M) 教育について考えるきっかけになりました。私は教育学部生ですが、ピアノ以外には興味がなく、大学も楽しくありませんでした。最後に、なんとなくこの講義を受講して、初めて真剣に教育について学んで、考えたなと思えます。具体的

な授業論についてはもちろんですが、私自身、学びたい、おもしろいという気持ちが湧いてきました。

教師に対しても、いい印象をもっていませんでしたが、平松先生や外部講師の3名の方々のお話を聞いて、「こんな素敵なお先生がいたのか」という驚きでいっぱいでした。親戚から「教員になれ」と言われ続けてきて、絶対にイヤだとつばねてきて、別の職種に内定もできましたが、今は、もっと教育について学びたい気持ちがあります。やっと大学生らしくなってきたなというころにはもう卒業ですが、卒業前に教育を学ぶおもしろさに気づけて本当によかったです。ありがとうございました。

4 授業改善への試み

学生の講座満足度や教師評価は思いのほか良かったが、学生の主体的な学びへの参加という点では課題が残った。来年度は、講座の最初に、教育実習の体験等から自らの「課題」を意識させたい。そして、15回の講座の中で、自らの課題がどのように変容していったのかをメタ認知できるように取り組みを行いたいと思っている。毎回の講座において、「課題」を深めていくような「しかけ」としての教材を作成したいと思っている。